

平成18年(昭和81年)6月13日(火)

# 東海の古代

第73号 編集・発行 古田史学の会・東海

代表 林 俊彦 〒461-0025 名古屋市東区徳川1-729

メール frttokai@zm.commuja.jp

電話/FAX 052(936)5012

郵便振替 00870-5-30752

## 「九州年号研究の新局面 —九州年号木簡の発見—

東海の会の7月例会は、去年に引き続き古田史学の会事務局長の古賀達也氏に来名していただき、講演会を持つことになりました。演題は上記の通り。会場も場所は同じですが、30名収容の広い部屋を用意しました。多くの方の参加を歓迎します。

古賀さんの最近の説の一部を紹介します。

1996年に芦屋市三条九ノ坪遺跡から出土した木簡について『木簡研究』第19号(1997)によれば、表裏に次のような文字が記されています。

「子卯丑□何 (以下欠)

「三壬子年□ (以下欠)

下部は欠損していますが、この壬子年は652年白雉三年に当たり、紀年を記した木簡としては二番目に古いそうです。さらに『木簡研究』には次のように記されています。

「年号で三のつく壬子年は候補として白雉三年(六五二)と宝亀三年(七七二)がある。出土した土器と年号表現の方法から勘案して前者の時期が妥当であろう。」

もしこの「三壬子年」の「三」の字が白雉三年のこととすれば、これは大変なことになります。何故なら、昔は年号の初めは大化で、その後に白雉が続くと習ったのですが、現在では『日本書紀』の大化や白雉・朱鳥の年号は使われなかった、あるいは『日本書紀』編者の創作で実際はなかったとする説が有力だからです。こうした有力説に

対して、この木簡は白雉年号があったという証拠になるのです。

更に大変なことに、九州年号説の立場からすると『二中歴』などに記された九州年号の白雉は『日本書紀』の白雉とは2年ずれていて、壬子の年(652)は元年となっています。従って、この木簡が正しければ、『二中歴』などの白雉年号は正確ではないということになり九州年号の原形を見直さなければならないからです。

「三壬子年」木簡がこうした重要な問題をはらんでいることに気づいたわたしは、ある疑問をいただきました。この「三」という字は本当に「三」なのだろうか。「三」ではなく「元」ではないのだろうかという疑問です。そこで『木簡研究』掲載の写真やインターネットでホームページの写真を見てみました。そうすると、何と「三」の字の第三画が薄くてはっきりと見えないばかりか、その右端が上に跳ねてあるではありませんか。というわけで、この字は「三」ではなく「元」と見た方が良いと思われるのです。皆さんもホームページの写真を見れば是非御覧下さい。わたしの判断が正しければ、「元壬子年」となり、九州年号の「白雉元年」と干支がぴったりと一致するのです。

(「古賀事務局長の洛中洛外日記69話」より)

古賀さんは古田先生らと木簡の実物の調査もしました。講演会ではさらに進展した研究が聞けます。

### 7月例会に参加を

日程：7月2日(月)午後1時～4時半

場所：名古屋市公会堂第1集会室(2階)

内容：古賀達也氏講演会

演題：「九州年号研究の新局面

—九州年号木簡の発見—

参加費：500円(維持会員は無料)

### 今後の予定

8月例会：お盆休み(日帰り旅行を計画中)

9月例会：9月10日(日)

例会は原則として毎月第2日曜日ですが、会場の都合等により変則的になる場合があります。日

程をよく確認しお出かけください。今回は会場が第1集会室になります。いつもの例会と違いますので遅刻しないようお願いいたします。

なお9月は会場を替え、資料館です。

参加費は五百円(維持会員は無料)。古田先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。

### 珍説炎上 太宰府焼亡

前回の通信 72 号で、自分のとんでもない無知無学をさらしてしまいました。「旅の宿題」と題した駄文で「古田史学では7世紀後半に太宰府は一度焼失したとします。特に古田先生は唐軍が焼いたと考えられておられるようです。」と書いてしまいましたがまったく事実と反します。特に古田先生は関わりありません。

深くお詫びして撤回します。

長い間太宰府政庁は藤原純友の乱で焼け落ちて、以後再建されず、今日までその礎石のみ残しているとされてきました。

ところが1968年以降発掘してみると、建物跡を含む地層が三期に分かれていることがわかりました。I期は掘立柱建物の柱穴跡(細かくはさらに三期に分かれる)、II期は礎石建物の遺構、そしてほぼ同じ位置に礎石を置いたIII期の建物跡の遺構を検出できました。

問題はII期の地層の最上部が焼土に覆われていたことでした。II期の建物は藤原純友の乱で焼けたものとされました。しかし、そのころは律令制社会が衰退を進めていた時期であり再建は困難な状況にありました。再建を示す史料も皆無です。だからこそ発掘以前は誰からも、藤原純友の乱以後再建されることはなかったと思われていました。

一方、発掘でわかった各地層の遺構の存在した年代が問題になります。通説ではI期を7世紀後半、II期を8世紀初頭～10世紀前半ごろ、III期を10世紀中ごろ～12世紀前半とするようです。しかし日本の考古学的年代決定の方法には今大きな疑いがかけられています。太宰府政庁の各

期遺構もその始まりが大きく早められて考えられつつあります。

その流れの中で私はIII期の建物も一気に早めてよいのではないかと思込んでしまったのでした。川端俊一郎著「法隆寺のものさし」という本があります。III期の建物が藤原純友の乱で消失したと強固に主張しています。よく確かめもせず私はこの説にのってしまったのでした。残念ながら土器や瓦の編年の大幅なズレとかはこの場合、関係ありませんでした。

II期の焼土層から検出されたのは「安楽之寺」銘の瓦でした。延喜5～19(905～19)年創建と見られる安楽寺ですから、その地層上部に建つのは天慶4(941)年の藤原純友の焼き討ち後の再建と考えざるをえません。

川端さんは「菅原道真が大宰権帥となって筑紫に来たとき『都府楼はわずかに瓦の色をみる』だけだったのは、その半世紀ほど前の天慶四年(941)藤原純友の乱で焼失したまま再建されることなく、落ちた瓦が風雨にさらされていたからである。それから千年の時が過ぎ、その焼け跡も洗い流され、あるいは埋もれてしまった」と書いています。(P218)

菅原道真は903年に亡くなっています。安楽寺はその菩提を弔うために建てられました。川端さんは道真の亡霊を見たのでしょうか。そんなことも気づかずに私は川端説に乗ってしまいました。自分自身で検証せず他人の説に安易にのる危険を痛感しました。

一昨年、東海の会の仲間とともに太宰府を訪れ、地表に露頭する礎石を眺め、これが九州王朝の夢の跡かと感慨深かったのですが、厳密にはそのもう少し下、地下に思いを馳せるべきでした。またIII期の太宰府政庁を再建したのは誰か、その原動力となったのは何かという謎が解明されねばなりません。九州王朝の末裔が一念発起したとは思いませんが、大陸との貿易にあの太宰府の威容が不可欠だったのかも知れません。